



いのち 生まれるとき

早船ちよ＝作
中島保彦＝絵



理論社刊

生まれるとき

早船ちよ＝作　中島保彦＝絵



早船ちよ

1914年、岐阜県古川町に生まれ、高山に育つ。
代表作として『キューボラのある街』全6巻、
『ちさ・女の歴史』全6巻（いずれも理論社）、
『世界の民話』全6冊（けやき書房）、『山恋い』
（草土文化）、『あすも 夕やけ』（新日本出版社）
ほか多数。新作家協会、児童文化の会所属。
住所：〒336 埼玉県浦和市瀬ヶ崎 326

作者 早船ちよ（はやふね・ちよ）

ND C913 A 5 変型 20cm 254p

画家 中島保彦（なかじま・やすひこ）

1982年初版 8393—31525—8924

いのち生まれるとき

1982年5月第六刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町 104 番地 電話 03(203)5791 振替口座東京 9-95736

いのち生まれるとき



——村のみなさん。ただいまから三十分間だけ灯
りをつけてください。そして村じゅうで、小さい
いのちの誕生を祝って下さい……。



もくじ

第1章 雪おんな

ええ娘さんやなあ
コウばばさの昔語り 17 6

第2章 山の誘い

クマの肉を食^はみに来い
いのちよみがえるとき 38 32

第3章 山は春祭り

嫁と子宝がさずかりたい
双頭の獅子舞にて 58 48

第4章 童女地藏

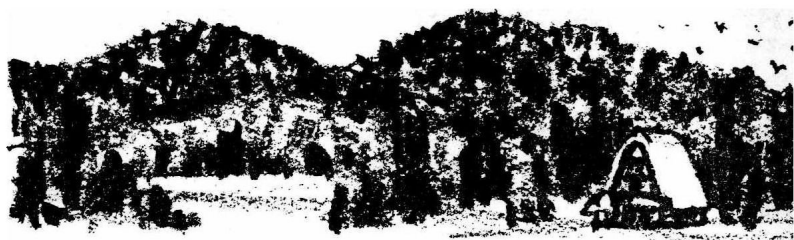
地藏さんの笑^えくぼ
人間より怖^{こわ}いものは 81 74

第5章 産休先生

ひとりの人間として
子連れの三つグマ 96 88

第6章 母ふたり

母たちのいのちはうずく
こんねうれしいことはない 113 104



第7章 ある出発

頭できめてかかるな
思いがけない衝動

132 122

第8章 集団農場

豚にも好かれない男
エリーゼのために

154 142

第9章 悲しい話

おら立ったまま話すわい
やわ肌の熱き血潮

172 164

第10章 未婚の母

子どもって何やろ
おお、未婚の母

193 184

第11章 風布みかん

秩父だよりつぎつぎと
火種はほっこり

215 204

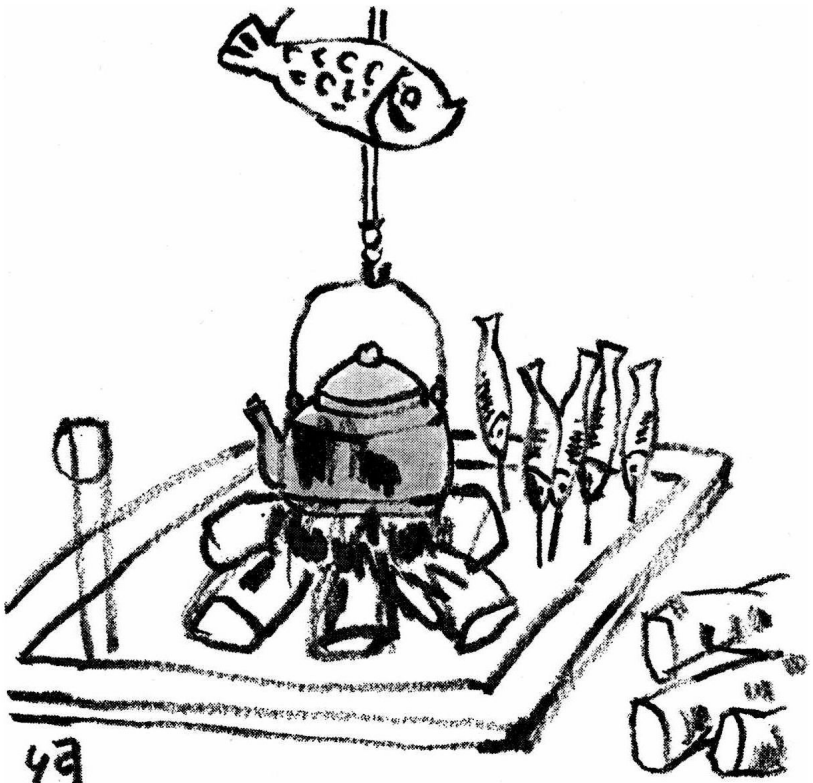
第12章 あとさき

生まれいずるもの
灯をかかげよ

238 228

そうてい・さしえ 中島保彦

第1章
雪おんな



ええ娘さんやなあ

遠藤家の前庭へ車をのりつけたとき、ふいに半鐘が鳴りだした。

「おうろ！ いまごろ火事か」

シラカンバ村教育委員会の萩本は、車からとびおりると、遠藤家の高台から村のあちこちを眺めまわした。ウタも、あわてて車をとびおりて、そばへきた。

「……どうやら火事じゃないらしいぞ」

「主事さんよ。半鐘の鳴りぐあいでは、ひよっとしたら山の遭難者かもしれんに」

「そんな馬鹿な。いまだき雪山をうろつく奴は、おおかた死にとうて来た都会のアホどもじゃ。ほかつとけ、ほかつとけ」

そうは言ったものの萩本は、カンカン——カン、カン——カン、カン——カン、カン——カンという呼集信号に、しばらく耳をかたむけていた。半鐘は、となり村からかもしれない。風のぐあいで遠くなり、またすぐ近くで鳴っているようにも思える。

——おお、嫌らし！ こんな寒い日に捜索隊になんか引っぱりだされとうないわ。

四十五歳のウタは女房消防団の班長である。ぶるんと身ぶるいして実家の遠藤家へはいつていった。「ばばさま！ ごさるか」

遠藤九郎右エ門リクローエム家のコウは、ウタの生母である。

萩本も、つづいて土間へはいつていく。

ひろい土間は、ひんやりと暗く、上がり框の囲炉裡ばたに、コウがちよこんと、うずくまっていた。

てのひらへのるほど小さなばさまは、ウタの縫^ぬってやった友禪^{ゆうぜん}の胴丸^{どうまる}を着ぶくれていた。

囲炉^{いろり}裡^りの灰^{はい}には、太いまきが埋^いけこんであり、うす紫の煙^{けむり}が火アマにたゆとうている。

「こんにちは！ ばばさま」

ウタは、大声^{おおいこゑ}をかける。コウは、からだをねじまげて暗^くがりから入口^{いりぐち}をすかして見るようにした。
白内障^{はくないしょう}の目^めが、うつろだ。

「まあ、めずらしいこと。囲炉^{いろり}裡^りで火をもすなんて——村でもこの家^{いえ}だけよ、きつと」

しばらくして、コウが笑った。

「よんべと、おとついの晩^{ばん}と、テレビがきての」

「ええっ！ テレビ局^{てれびくわう}がどうして……」

「そうよ、そうよ。昔^{むかし}の報恩講^{ほうおんこう}さまをやってみせてくれということでの。はははは、は。クローエムとかが、あわてて、こたつやぐら片^{かた}づけて、昔^{むかし}の囲炉^{いろり}裡^りにもどいたんじや」

「ああ、そんてか。ああ、おかし」

ウタは、古いランプやら弓張提灯^{ゆみはりちようちん}までだされているのを見つけた。コウは、ウタと萩本^{はぎもと}を見ながら述懐^{じゆつわい}する。

「昔^{むかし}は、なあ。大家族^{おほけぞく}やったでなあ……でかい囲炉^{いろり}裡^りが二つもあって、そのどっちにも楯火^{たてび}を燃やいたものよ……」

「そうか、おらんな」

「知るかよ、ウタはまんだ生まれとらなんだ。わしが若嫁^{わがよめ}のころの話^{わがし}よ……」

「あつ、そのことや。そのことについて頼^{たの}みにきたのや、ばばさま」

萩本は上がり框に腰をおろして、大声で話しかける。

「ばばさま。おら、役場から頼みがあつて来たんじやさ。東京の大学のえらい先生が学生をつれて村へござった。ばばさまの娘のころ、花嫁のころの話を聞きとうて、わざわざやつてござったんじや」
耳のとおいコウにも、話はすぐに通じた。

「そうか、汽車にのつてか。遠いところを、こんな在へ、ようござったなあ」

ウタは、コウの表情を注意ぶかく読みながら、いった。

「俺もいっしょに、役場の二階へついていくでな。さあ、行かまいか。みんな待つてござるに」
「……………」

コウは、目をつぶつて黙っている。しばらく、じつと身動きもしないでいる。やがて、ぼつりと聞きかえす。

「話を聞きたいってか」

「そうや、そや。そんでこうやつて車で迎いにきたんじやさ」

コウは、首をふる。萩本のことばがきこえなかったふうに、つぶやく。

「おら、るすばんせんならんも」

「るすばんなんて、かかさま」

ウタは、コウの娘にかえつたように笑うのだった。

「だが、こんな一軒家へ用事があらずか。ばばさひとりの家じや、たまにキツネがあそびにくるぐらいなもんよ」

ウタは、自在鉤から重たい黒い鉄びんをおろし、勝手知った戸棚から茶碗をだして茶を注いだ。

「や、やや。こいつはどうも。……そうか。クローエムとつあは山か？」

と、萩本はきく。そのとき、また半鐘がはげしく鳴った。すぐ近くの火の見かららしい。コウは、そっちへ顔を向けながら、いう。

「泊りこみで、もう幾日もダム現場へ稼かせぎにいつとるぞい」

「そうか。かかまは？」と、萩本。

「なんやら、パートに行くって出たぞ」

「電機の内職センターか」

「いんにや」

「農協の缶詰工場やろ」

「そや、そや。わしらといっしょや」

ウタはこたえて、そばにおいた弁当べんとう包みへちらっと目をやった。じぶんは缶詰工場へ働きにいく出がけに役場前で萩本に出あい、車にのせてこられたのだ。——いいじゃないか。あんたとばばさまの日当ひあたうは役場で持つ。ちよっと手伝ってほしいのだ——と、萩本はいった。

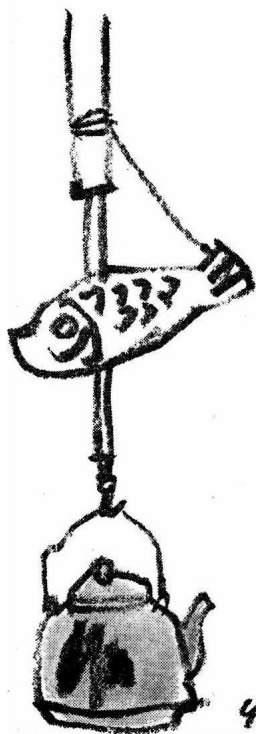
——それに、ばばさが、あんばよう話せなんなら、そんなときは、ウタさ、あんたが口をそえて助けてやってくれ——と。

コウは、ことし八十一歳である。耳が、よほど遠くなっているのだった。

「兄のクローエは？」

萩本が、かさねてコウにきく。

「営林署えいりんじょじゃぞい」



「ブナ沢か、伐採^{ばっさい}やね。えらいこっちゃ」

萩本は、ため息をもらす。このごろ教育委員会の用事で村のどこの家へ行っても、じさ、ばばさだが、るす番してござる。若いものは、山しごとのほか都市へ出かせぎにいつてしまつて、幼い子ども姿が見られなくなつた。あかんぼうのいる家はないといつていい。あかんぼうの泣きこえのきこえない村、おむつのひるがえらない山ぶもとの集落^{しゅうらく}は、しーんと無気味^{むきみ}に静まりかえっている。

四十歳をこえた女房連中が、村の消防隊をひきうけるようになったが、その女房たちまで現金収入のあるバイトに出かけていく。

萩本の胸に、暗い影がかすめる。こんなときには、火事や遭難^{そうなん}は、ぜつたいにおこしてもらいたくないものだ。彼は土間へおりて、うら口から半身^{はんしん}のりだして、天^{あま}の水晶山系^{すいしやう}のほうへ目をやつた。

屋敷^{やしき}の左手、びようぶ岩の山塊^{さんかい}の上にクラジシ山がどっかりと大きな山容を見せている。

そのさがブナ沢で、遠藤家の兄のクローエや、ウタのひとり息子^{ぼなこ}の信吾^{のぶご}が伐採^{ばっさい}しごとをしている。ブナ沢を上るとニレの木平^{きへい}でその西北のサルガババ山から天^{あま}の水晶山^{すいしやう}へ急カーブを描いて、せり上がっている。もう、どの山にも雪が白くかぶさつていて、その上の空は黒い雲が、風に流されている。

萩本は——天氣が變つたな——と、その疾^{はや}い雲足をながめていて、しばらくして囲炉裡^{いろり}ばたへもどつてきた。

そのとき、ウタとコウがいい争つていた。

「さ、ばばさま。えい着物に着かえて」

コウは、すわりこんだまま、ウタの手をふりはらう。

「おいた。汝^{わが}だけ行け。おら行かんも」



「どうしてや。からだぐあい悪いか」

「いんにゃ、悪うない。そうやけど……」

「……………」

「おら、役場なんかにつれていかれるような悪いことはしとらんも」

萩本は、ふきだしそうになる。村の年より連中はみな、役場と警察が大きらいである。

コウは、しゃんと背すじをのぼすと、萩本とウタを、まっすぐに見すえた。

「お身ら、ようきけよ。すべて人に話をきかしてもらうには、それなりの礼があるもんじゃ」

「へえ」——萩本は、おもわず膝を正した。

「話をききたいから、役場へこいっていうのは、どこの殿さまじゃ」

「ええっ？」と、ウタ。

「その偉い様に、そいって呉りよ。話がききたいなら、じぶんの足で歩いて遠藤家の囲炉裡いろりばたへ来さっしゃいと」

コウの激しい語気に、萩本は吞まれた。

こうしてコウは、東京の大学からきた民俗学調査団一行を、機嫌よく囲炉裡いろりばたへ迎える。

「ようござった、ようござった」

じぶんで立っていつて白樺の櫓はたをひとかかえ持つてきて、どさりと炉いろりばたへおく。

紺盲こんめうの外出着をしゃんと着て、メリンスの前だれをしめた老婆の姿に、ふしぎな色気がただよっている。赤いひもをタスキにかけたせいかもしれない——と、ウタはコウを見直している。やはり、着がえをさせ、髪かみもきちんと結びあげてよかったなと思う。

萩本が、櫓はたを囲炉裡いろりへくべた。衝立ついででへだてたもうひとつの囲炉裡いろりへも燂あつをうつし、小枝こえを折ってくべ、櫓はたを灰に埋める。なれた手つきで火箸ひばしをつかった。囲炉裡いろりには、小魚こいしが串にさして焙あぶつてある。ウタが、茶のしたくをしながらいふ。

「あんたさまら、おいでるといので、囲炉裡いろりを二つとも片づけないで、報恩講ほうおんこうのやわいのまんま、迎えますのや」

「そうや、そや。遠藤家で二つの囲炉裡いろりに、いっぺんに櫓火はだびを焚たくなんて五十年ぶりやろうかのう」
コウは、にこにこ目細めて、そばにすわった女子学生のマキを、「雪おんなみたいに色の白い子や」と、みとれる。

マキは、二十一、二歳か。まっ白いぶかぶかしたアンゴラウサギの毛糸のセーターを着ている。萩本が、衝立ついでごしにべつの囲炉裡いろりばたから大声で呼びかけるようにいった。

「先生や学生さんがた、えいときに来られましたな。おとついとゆうべと、テレビ局がきて、遠藤家の内部をカメラでうつしていったで、五十年昔がそのまんま再現されとりますでな」

「なるほど。これも演出ですか」

白髪まじりの教授が、囲炉裡の灰につきさした焼魚の串をぬいて見せる。

「いんにゃ。魚はあとで食ってもらいます」

と、ウタがいった。マキが、串の魚をみて切口上できく。

「その魚、アマゴでしょう？」

「知っておいでるな」と、萩本は白いセーターの丸顔の娘をふりむく。

「アマゴは、もともとは太平洋の魚とききました。五十年まえには、このへんの川にはいなかったはず……それで」娘は、くつくつと笑いだす。「この囲炉裡が五十年まえの再現だなんて、うそです」

女子学生らしいはきはきした口調だ。萩本は、ひざを叩いて笑った。

「ほんとや。あなたのいわつせる通りや。アマゴ養殖は近年にはじめたことやもな。五十年昔に焼いたのは、岩魚か山女、アユなんかじゃ」

コウは、雪おんなの娘が氣にいった。白カンパの皮をひとつかみ、炉へなげこんだ。

白カンパの木皮がめくれてちぎれ、パチパチ音をたててはぜ、炎は黄、燈、赤金いろに光り、きらめき、紫いろの影を、マキの頬へちらちらと匍わせる。

「わあ！ 白カンパを焚くなんてロマンチックだなあ、見ろよ、この炎のいろ」

黒いとっくり首のセーター、眼鏡を光らせて学生の山口がのぞきこむ。

「白カンパの皮には樹脂が多く含まれている。それで、よく燃えるんだよ。信州の諏訪湖のほとりだったと思うが……お盆の迎え火送り火に街の辻々で焚いているのを見たように思うが……ね」

ジャンパー着の中年男の助手、横地が学究くさい口調でいった。

コウが、顔をあげた。

「ああ、ああ、それなら俺もおぼえとる。娘のころに見たわい」

「信州でか」と、ウタ。

「娘のころ、信州で？ ああ、そいつを聞かして下さいよ」

二十歳すぎぐらい、ジーンズの上下を着たやせた学生が、あわててかばんからテーブルコーダーをとりだす。こうして、コウの話の聞きとりが始まった。

「糸ひきの出稼ぎに信州へ行ったんやさ、飛驒の娘たちは、みんな」

ウタは、ひとりひとりへ茶碗をくばりながら口をはさむ。

「なあ、ばばさま。ばばさまは、下諏訪か、岡谷か？」

老婆の目は、視点を失って、しばらく宙をさまよっている。そのあとで、ゆっくりと声が出てきた。

「俺は、十のときに岡谷のキカイに売られていって二年ほど子守奉公をした……」

口べらしのためだった。金は五円ほど、親がもらったらしいのを、あとで知った。

「……見習い子で糸がとれるようになって、年にいちどは家へ帰してもらえるようになった……そうや。そのうち、一人前になって下諏訪の会社でも稼いだなあ。——そのころは、野麦峠をこえていった……」

「ああ、これは何だ！」

森——ジーンズの上衣の学生が、茶碗をかかえたまま叫び声をあげ、腰を浮かした。
「どした？ シロー」と、マキ。

ウタは、陽気に笑う。